

中心部震災メモリアル拠点検討委員会における検討状況

役割

令和2(2020)年度の中心部震災メモリアル拠点の基本構想策定に向けて、検討委員会としての提言をまとめる

委員

委員長	野家 啓一	東北大学 名誉教授
副委員長	本江 正茂	東北大学大学院工学研究科 准教授
委員	植田 今日子	上智大学総合人間科学部 教授
	遠藤 智栄	地域社会デザイン・ラボ 代表
	大泉 大介	株式会社河北新報社 防災・教育室部次長 兼 営業局営業部部次長 兼 営業局業務推進部部次長
	佐藤 翔輔	東北大学災害科学国際研究所 准教授
	佐藤 泰	せんだいメディアテーク 元副館長
	志賀 理江子	写真家
	マリ エリザベス	MALY Elizabeth 東北大学災害科学国際研究所 准教授



第2回検討委員会



第3回検討委員会

会議の開催状況

第1回：平成31(2019)年1月30日 第2回：平成31(2019)年3月28日 第3回：令和元(2019)年5月16日

委員の意見

意見の分類

Q1. 検討の進め方はどうあるべきか？

Q2. 拠点を考える上での大切な視点は？

- [1] 東日本大震災はどのような経験だったのか？
- [2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？
 - (1) 仙台の特質とは何か？
 - (2) 中心部の場所性とは何か？

Q3. 何のための拠点なのか？

- [1] 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために
- [2] あらゆる危機を乗り越えるために
- [3] 都市の未来のために
- [4] 伝承一般

Q4. 拠点の具体像や施設の要否をどう考えるのか？

◎ その他のキーワード

第3回検討委員会までの意見整理（下線が3回目の意見）

Q1. 検討の進め方はどうあるべきか？

<p>①まず先に何をやる場なのか考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まずは誰か何をやるかを考えた上で、最終的に必要な施設があるとなれば何なのかという順番で議論を進めるべき ・施設が必要か否か言う前に、何をやるのか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒にどんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ、生きた場所は作れない ・施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要。それが無ければハードと運営がかみ合わず、市民を巻き込んだ活動につながらない <p>②過去の事例に学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・敬虔な雰囲気だけでは人は来ない ・震災復興の面的なことを伝える施設が多く、個人のストーリーを扱う施設が少ない ・写真のなかの面影は、全然知らない人にも訴える力がある。アウシュビッツ記念館のように遺影が並んでいる施設もあるが、今回のような津波や地震など自然が原因となった場合は、また違うアプローチがあるような気がする ・広島平和記念資料館は今年展示更新を行った。いろんなことを伝えなければいけない中で、個々の被災したものに展示の肝を据えたようだ。館長や展示更新に携わった人から、そこにたどり着いた背景・知見を学んでも良いのではないか <p>③他の被災地に聞く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の被災地から見て、仙台の拠点に何を求めるのか聞いてみるとよいのでは <p>④行政的な施設にしないという心構えが必要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予算、人員配置など、行政の仕組みの限界を超える取組みであり、行政施設にしないという心構えが必要 <p>⑤早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論を</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拠点づくりにあたっては、通常のやり方を超える覚悟を持ち、早い段階で将来のスタッフを巻き込んだ議論ができればいい <p>⑥拠点の検討と並行してすべきこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災の振り返りや、記録の発表・展示、記録の支援など、震災から10年や拠点づくりにつながることを意識的にやっていくべき <p>⑦行政・メディア・市民・企業がそれぞれ「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台は市民協働、市民力のまちという系譜がある。脱スパイクタイや運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ることが出来れば、仙台市独自の力を持ったものが出来るのではないか

Q2. 拠点を考える上での大切な視点は？

[1] 東日本大震災はどのような経験だったのか？

<p>①未曾有の経験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これだけ多くの方が犠牲になったという犠牲の重さ、暮らしや幸せが奪われたということ ・8年経っても2533名の方々がいまだに見つかっていない <p>②想像を超える出来事・全てを理解し得ない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の震災は想像を超える出来事であり、理解できないことがある怖さが、この震災の本質。分かりやすく括ることで安心するかもしれないが、それは誤解に過ぎない ・東日本大震災は人知を超えた巨大な出来事であり、全ては分かり得ない。その「分らなさ」をどのように引き受け、伝えて行けるかがすごく重要 <p>③原発事故</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原発事故の取扱い（当拠点での位置付け・比重）を考えたい ・仙台の拠点性と全体性を考えると、原発も含めて東日本大震災の全体像を伝える必要はある（再掲） ・福島原発事故は、東京の人が自らの党派性の中で主張することに利用された側面もあった。地元の人是对立する意見の狭間に置いていかれ、何を信じればいいのか分からなかった
--

[2] 仙台の中心部で展開する意味は何か？

問題提起		
<p>(1) 仙台の特質とは何か？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台ならではの機能も追及すべき ・国・県・市が同じようなものを造っても無駄と批判されるだけであり、仙台市として拠点づくりを進めるためには、ステートメント（表明）が必要 		
背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>①東北の拠点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東北の中での中心的な役割。長いスパンでの取組が必要。アーカイブ1つとっても、その体力をもってやれるのが仙台であるという心構え ・東北唯一の政令市として、被災3県を視野に展開を ・岩手県・宮城県・福島県、各県それぞれに復興祈念公園とそこに建物はあるが、被災3県を横断的に取り扱う施設は無い ・地の利、人口規模、予算などを考えると、東日本全体を見渡してメモリアルをつくれるのは仙台しかなく、仙台にはそれに応える責任がある 	<p>①各施設・団体との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台にまず来て、次の場所に行けるようにすることが大事な役割 ・施設同士をつなげると同時に、地域につなげる、地元・東北の文化も大事に ・マルチノード（様々な場所の接点）として様々な施設とつながり、訪れる人の出発点として、様々な場所のことを伝えられる施設 ・既にある被災地をつなぐネットワークを大切に連携ができると良いのではないか <p>②アーカイブの展開・連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重したい。奪うのではなく、被災地連携の一つとして、アーカイブ研究やアーカイブの支援ができると良い ・震災の記憶を目に見える記録として残していく、その大変な作業を東北の被災地のなかで唯一組織的・継続的にできるかもしれないのが、仙台。少なくとも挑戦する義務はある <p>③東日本大震災の全体像発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台の拠点性と全体性を考えると、原発も含めて東日本大震災の全体像を伝える必要はある（再掲） ・震災の全体像として、どの項目・レベルまでをどのような手法で伝えるか検討が必要 ・仙台から各地へつなぐことも含め、全体像の発信を考えるためには、国や県の状況も知る必要がある ・訪れる人の目線で考えると、ワンストップで多くの事を学び、知り、感じられるように、東北の玄関口である仙台市の中心部で全体像がしっかりと示す必要があり、他施設を考慮して扱う内容を減らす必要はないのではないか ・交通網から見て一番訪れやすい場所であり、ゲートウェイとして全体像を見られ、個別の色々なところにつなぐ役割はあると言えるかもしれない ・仙台にも福島からの県外被災者を受け入れたという事実がある。仙台で起きたことの一つであり、福島のことを拠点に取り入れることは当然だと思う ・オール東北と考えれば原発も含まれる ・地理的な位置づけと津波被災地も有する被災者であるという二重性の立場において、原発事故も含めた東日本大震災の全体像を日本はもとより国際的に提示していくべき 	<p>①訪れた人が目的や時間に応じて周る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訪れた人が目的や時間に応じて、様々な施設を周る <p>②信頼性の高い情報の発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台市に独立したメディアがあれば、今後、何か起きた際に、人々がそこへ情報を求めたり、集まったりすることが考えられる <p>③多様な情報・経験の発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独立したラジオのようなものを作ることができれば、抽象度の高い音楽から、個人のオーラルヒストリーやアーカイブを活用した個別具体的な情報、全体像などを積極的に発信できる <p>④反復的な音による記憶の継承</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メディアとして時間を扱うことになるので、例えば震災が起きた時間を毎日音で伝えることはできるのではないか

背景	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>①東北の拠点</p>	<p>④信頼できる独立メディアの設立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結局、福島原発事故は、東京の人が自らの党派性の中で主張することに利用された。地元の人是对立する意見の狭間に置いていかれ、何を信じればいいのか分からなかった(再掲) ・真実を伝えるためには、きれい事だけではなく、不都合な事も伝える必要があり、そのためには不偏不党の信頼が重要。信頼は災害が起きる前から育てていけ ・信頼の醸成には、情報源など事前のネットワーク形成に向けて一歩一歩近づいていくことが必要であり、どのようにして実現していくかが重要。政治的・経済的な都合で押し流さずそのようなことができるのは、体力のある仙台のようなところだけ ・現実の情報を利害と関係無く公平に発信できるように、独立したメディアを立ち上げられないか ・独立したメディアが信頼を得るためには、そこで働く人が本気で努力しないと行けない ・メディアから情報を受け取る人は、メディアが誰のお金で誰に向けて発信しているのか気にしている。独立したメディアが独立性を確保するためには、資金のあり方も考えなくては行けない ・ハードは小規模で良く、メディアの質を上げることに資金を投じるべき ・独立したメディアとして、情報を素早く伝えられるラジオのようなものが作れば良いのではないか ・「ラジオ的なもの」とは小さく方向性が持たないメディアという比喩である一方、メディアとして成立させるには、一定の方向性を持って編集することも必要となる。全体像を示す責任とも矛盾することから、どう情報を扱うかも議論しなければならない ・東日本大震災に特化した独立メディアを作ること考えていくべきであり、編集で分かりやすくするというだけではなく、個人の被災レベルに沿った言葉を選び、複雑さを複雑なままに伝え、どのように信頼を得ていくのか考えるべき ・わかりやすくすれば支持は得られるが、複雑さをひきうけなければ信頼は得られない ・複雑さをどの程度許容するかを考えるべきであり、訪れる人に複雑なことを複雑に提供すると丸投げ・役割放棄にもなりかねない ・訪れる人に複雑さを丸投げしないためには、拠点が複雑さを受け入れ、分からなさや揺らぎ、ぶれをあきらめず何度も問い掛ける姿勢とそこにいるスタッフが大事 	
<p>②市民力のまち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民協働を進めてきた仙台市として市民がアクションを起こす場所を作る ・仙台は市民協働、市民力のまちという系譜がある。脱スパイクタイヤ運動のように、行政・メディア・市民・企業のそれぞれが「自分がやった」と思えるようなプロセスを経ることが出来れば、仙台市独自の力を持ったものが出てくるのではないかと(再掲) ・市民がいろいろなアクションを起こしてきたことが魅力的で、仙台にしかないユニークさの一つではあるが、その記録や現場に出会う術がなく、つなぎ手が不足している 	<p>①市民のアクションをつなぐ人材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例えば地震被害軽減に向けて向かう際のつなぎ手として各地にあるフューチャーセンターのように、市民の力を防災やこの検討委員会で議論していることにつなげる人材が大事であり、それがキュレーションやユニークさにもつながる。早めに人材を育てていくことも必要 	
<p>③繰り返してきた災害の歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台には約30年に1度の頻度で地震が繰り返してきたという固有性がある ・津波被害に焦点を当てすぎた伝承だと、利府長町断層による直下型地震が起きた時にカバーしきれない。将来起こり得る災害を見通して考えるべきだが、どこまでカバーすべきか ・大地震と津波が400年単位で襲来していることを鑑みると、次の400年に向けて考えるくらいの歴史感覚を念頭に置けると良い。その間に利府長町断層型の地震も起こるかもしれない 	<p>①災害文化の拠点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仙台では常識だと思われている独自の災害文化を目に見える形にする拠点(ミュージアムやそれ自体の活動拠点など) ・仙台では「防災」のみの切り口だけでなく、「歴史・文化」、「日常生活」の重なりで伝えられるのではないかと ・例えば川が氾濫することに備えて内陸の家に船があるように、災害と共存している状況を災害文化と呼んでいるが、主に地方部にある文化。都市化により災害文化と逆行している仙台が、災害文化にチャレンジするというのは、とてもインパクトがある ・災害文化というためには、災害で経験したプラスの面(我慢強さ、近所づきあいの復活、絆など)と復興が進むにつれて出てきたマイナスの面(堤防の高さ問題や訴訟など、利害や観念の対立)の両方を伝えていくべき 	<p>①災害文化を持つ都市として宣言</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島市や長崎市のように、一つの自治体であっても、自分たちはこのような自治体だということを宣言している。防災環境都市仙台とずっと謳い続けるならば、仙台は防災文化ではなく災害文化を持っている都市を作っていくという方向性を市民と共有できないかと思う。 ・災害文化を持つ都市と宣言するならば、水やヘルメットの備蓄のような単純な防災対応だけではなく、災害時の情報共有のされ方やその信頼性が揺らぐことへの不安など、想定外を乗り越えてきたからこそ言えることも扱うことが大事。
<p>(2) 中心部の場所性とは何か?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沿岸部と市街地を両方持つことが仙台市のユニークなところ。「中心部は現場ではなく、完全に発信に徹する場所」と捉えるか、「中心部も被災の現場であり、沿岸を支える現場でもある」と捉えるか、市中心部の立ち位置には2つの考え方があり 		
<p>①震災当時の被災状況を感じられる現場ではないことを念頭において考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・距離の遠さを理由に沿岸部施設に行かない市民に対して訴求できる可能性があるが、人が来てくれない可能性もある 	<p>①被災そのものを伝えることは沿岸部に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないかと 	
<p>②沿岸部のみならず全てが被災の現場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこまでが被災地かという線引きをしがちだが、グラデーションはありつつも沿岸部のみならず、丘陵部を含め全てが被災地であるという認識でいるべき ・地理的なハブの役割を果たすと同時に、津波被災地も有するという二重性を生かせると良い ・中心部で被災地ではないという視点だけだと上から目線になる。自身も被災地であるという姿勢を前面に出していくべき ・被災の中心地ではないという姿勢は、被災の深刻さを他者に押し付け、そこと距離を置き、上から目線で見ることにつながり兼ねず、倫理的に良くない 		
<p>③他施設との関係性や活用を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・求められる機能によっては施設規模・立地に影響する。現在市内で検討中の施設等との関係性も含めて検討すべき ・既存施設を活用する可能性もある。特にメディアテークの役割が大きい 		

Q3. 何のための拠点なのか？

何のために (目的) / 哲学 (かくありたい)		
<p>[1] 過去の犠牲を無駄にせず、世代を超えて東日本大震災の経験をつなぐために</p> <ul style="list-style-type: none"> 犠牲と混乱を繰り返さないため、犠牲を無駄にしないために 世代間論理：世代を超えて災害の経験がバトンタッチされていくような場に 		
何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
<p>① 持続的な動き</p> <ul style="list-style-type: none"> 過去を記録するだけではなく現在とのつながりをもたせることが必要 災害を乗り越える準備も常に移り変わる。作って終わりではなく、常に更新し続けられるものが求められる (再掲) 東北の中での中心的な役割。長いスパンでの取組が必要。アーカイブ1つとっても、その体力をもってやれるのが仙台であるという心構え (再掲) 人の死によって気づかされたことを無駄にせず、今の現実をもっとよく見たり向き合うための場であるべき。そうでなければ、未来に対して過去に対してもアクティブではない 何かをつくって一丁あがりにはせず、持続的な活動の場に 	<p>① 財源</p> <ul style="list-style-type: none"> 100年先を見通し安定財源を確保する <p>② 人・組織</p> <ul style="list-style-type: none"> 編集部のようなものを構え、被災の体験を何十年、何百年にわたって聴き続けるようなアクションにつなげられるといい 訪れる人に複雑さを丸投げしないためには、拠点が複雑さを受け入れ、分らなさや揺らぎ、ぶれをあきらめず<u>に何度も問い掛ける姿勢とそこにいるスタッフが大事 (再掲)</u> どのような準備、作業、人材が必要なのか、技術的な問題も含めて、アーカイブを作るための検討を早めに始めるべき 例えば地味課題解決に向かう際のつなぎ手として各地にあるフューチャーセンターのように、市民の力を防災やこの検討委員会で議論していることにつなげる人材が大事であり、それがキュレーションやユニークさにもつながる。早めに人材を育てていくことも必要 (再掲) 施設が必要か否か言う前に、何をするか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒に<u>どんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ、生きた場所が作れない (再掲)</u> 施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要。それが無ければハードと運営がかみ合わず、市民を巻き込んだ活動につながらない (再掲) <p>③ 災害文化</p> <ul style="list-style-type: none"> 仙台では常識だと思われている独自の災害文化を目に見える形にする拠点 (ミュージアムやそれ自体の活動拠点など) (再掲) 東日本大震災は非常に大きな悲慘さと不安を皆で同時に体験した出来事。災害文化として、災害を受けた悲慘さや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか 仙台では「防災」のみの切り口だけでなく、「歴史・文化」、「日常生活」の重なりで伝えられるのではないか (再掲) 例えば川が破壊することに備えて内陸の家に船があるように、災害と共存している状況を災害文化と呼んでいるが、主に地方部にある文化。都市化により災害文化と逆行している仙台が、災害文化にチャレンジするというのは、とてもインパクトがある (再掲) 災害文化というためには、災害で経験したプラスの面 (我慢強さ、近所づきあいの復活、絆など) と復興が進むにつれて出てきたマイナスの面 (堤防の高さ問題や騒音など、利害や観点の対立) の両方を伝えていくべき (再掲) <p>④ 親から子に継承する遊びの場</p> <ul style="list-style-type: none"> 追悼のシンボルとしてモニュメントが必要であり、周りでは子どもが遊びつつ、モニュメントの由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するような二重の機能が必要 <p>⑤ 市民行事</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設だけでなく市民行事にすることが大事。住んでいるまちの小学校が集まる音楽祭のようなイベントのように、<u>全部の小学校が関わり思い出に残るような行事を大事にしたい</u> <p>⑥ 音などの体に訴えかける仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ハードではなく、体に訴えかける音などで過去の記憶を日常化させ、現在そして未来に重ねる仕組みが良い 	<p>① 日常的に話題になる機会</p> <ul style="list-style-type: none"> 小さい頃の記憶が長く続く双子のように、語り合うことで記憶が長く続いている状況があると良い <p>② 災害をきっかけに生まれる行事</p> <ul style="list-style-type: none"> 長崎には江戸時代の土砂災害をきっかけに、月に1回饅頭を配る「念仏講饅頭配り」という行事がある。100年以上続き、1980年代の豪雨の際にその集落では死者が1名も出なかった。このように100年以上先に結果を残すような行事が作れると良い 歌のように市民全員が共通で出来ることがある <p>③ 反復的な音による記憶の継承</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎日、地震が起きた時間に鐘を鳴らすことで、過去の記憶を日常化させる
<p>② 多様な経験/あらゆる人に受け入れられる物語/矛盾と複雑さを受け入れる</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災のレベルが個人であまりにも違う状況がある 被災の状況に応じ、時間が経ってからでも語れるように、市民に開かれていることが必要 多様な物語が交錯する場、物語を紡ぎなおす場に 追体験できることやリアリティを突き詰めると、被災者の方が入れない施設になりかねない。被災した当事者にも開かれた施設に 死が人の感情に与える影響は大きく、震災経験者でなくとも、身近な人の死に向き合ったことがある人は、追体験できる可能性がある 自身は抽象度を上げ、行方不明の方も、動物や微生物で解体され、食物連鎖でつながり、この世で生きているのだという気持ちがある いろいろな形で語り整理をつけることで、完全な忘却ではなく、忘却のバランスが大切 震災であらゆるものの価値が一度フラットになり、その後の復興に伴う経済活動の中で、自分か誰だかわからなくなり、自分の物語を失うような状況があった 今回の災害が過去の事象になったとしても、その時代に生きる人と響き合いながら伝えていられると良い モニュメントなどは、価値観を変えられた破壊や人の死などから発せられた沢山の物語が背景にあり、人々に愛されるものであるべき 例えば土砂崩れによる被災者など「他にもっと大変な人がいる中で声高に言うてはいけない」という気持ちを持つ方もおり、ストーリーが隠れやすくなっている。そのようなミクロの部分も表現することが大事 いろんなことが混沌とし、線引きできない事や矛盾があるのが当たり前である中で、矛盾を大切に、引き受ける場所になればよい 	<p>① 伝えるメディアの扱い方</p> <ul style="list-style-type: none"> 実体験を伴わずに被災映像をテレビなどの媒体で見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」とどう向き合うかは課題 被災された人は、悲慘なものを見たくない反面、自身の物語とのつながりを求めていることもあると思う。時間が経てば、その関係性は変わっていく 実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」が今の社会の複雑な問題につながっているような気がするが、自身は震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった 現像した写真や手書きの文字に縁遠い世代に共感し得るかは分からないが、写真洗浄が行われた無数の写真、避難所などの張り紙などが呼びかける力はとても大きかった <p>② 多様な経験の総体と個々の経験へのアクセス</p> <ul style="list-style-type: none"> 全ての経験を詳細に見なくとも、それらの総体が感じられ、それから個々の経験にアクセスできることが必要 例えば震災の夜の満点の星空のように、多様な経験の総体として純粋な美しさを持ったものが表現できれば、怖くても人は近づけるかもしれない 全体を見渡すイメージとして、大きな雲の中に紐でつながった星が点々とあり、見る人がそれに触れることで紐づけられた情報が伝わってくるような仕組みができればよい。そうすれば個別の情報に触れつつ、それが全体のごく一部分であると感じることにつながるのではないか <p>③ 複雑さを複雑なままに伝える独立したメディア</p> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災に特化した独立メディアを作ることを考えていくべきであり、編集で分かりやすくすることではなく、個人の被災レベルに沿った言葉を選び、複雑さを複雑なままに伝え、どのように信頼を得ていくのか考えるべき (再掲) わかりやすくすれば支持は得られるが、複雑さをひきうけなければ信頼は得られない (再掲) <p>④ 複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な個人・団体の記録がアーカイブされ、見ることができ、かつ、負の側面、被災の現実、出来なかったことなどを伝えていければ、複雑性をそぎ落とさないところになるのではないか 複雑さをどの程度許容するかを考えるべきであり、訪れる人に複雑なことを複雑に提供すると丸投げ・役割放棄にもなりかねない (再掲) 訪れる人に複雑さを丸投げしないためには、拠点が複雑さを受け入れ、分らなさや揺らぎ、ぶれをあきらめず<u>に何度も問い掛ける姿勢とそこにいるスタッフが大事 (再掲)</u> 過去のことを記録するためというよりも、独立した状態を保ち続け、未来における信頼の土台として、個々の記録や情報を不偏不党に集めたアーカイブが必要 どのような準備、作業、人材が必要なのか、技術的な問題も含めて、アーカイブを作るための検討を早めに始めるべき (再掲) 中心部施設のアーカイブは、複雑さを保つ目玉。能動的に取り出せる人には提供できるようにし、そうでない人には時代に合ったキュレーションなどで見せていく 展示で見える1場面の先には複雑なことがあり、全体像は理解しえないが、理解しえないことがあること自体を理解してもらいつつ、特定の事象については十分に理解してもらおうような建てつけも可能ではないか 人それぞれの視点と経験によってたくさんの真実があり、扱う情報に線引きし、整理しすぎると見誤る恐れがある。同じ展示を続けるのではなく、時代や期間に応じて思い切ったキュレーションを試みるのが良いのではないか 東日本大震災の全体を単純なストーリーでまとめる事は誰にも出来ない。揺らぎを引き受け、現在進行形で作り直しながら行くという心構えをもった施設であるべき 市民図書館の震災文庫を見たが、記録の量が膨大であり、その人に応じてキュレーションができるような案内人が必要 	<p>① 居合わせた人同士が伝え合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災経験者が自身の経験を新市民に話すなど、その場に居合わせた人同士で経験を伝え合う <p>② 写真を前に語り合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 生きている人も死んでいる人も等しく並ぶ写真洗浄の場が、悲慘な現実であらうような場であり、確かな場所を求める思いに写真の役割が果たされていた 見る人・来る人によって記憶が細解かれ、新たなものになっていく場であってほしい

[2]あらゆる危機を乗り越えるために		
<ul style="list-style-type: none"> ・災害を乗り越える準備も常に移り変わる。作って終わりではなく、常に更新し続けられるものが求められる ・これから起こり得る災害、想定外があること、それにどう向き合っていくか考えることも重要な視点 		
何をしたい(要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①市民のアクションにつなげる仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・建物だけではなく、人の育成や研究など、市民にアクションを起こしてもらえらる仕組みを考えていく場が必要 ・災害の悲惨さを伝えて終わるのではなく、個人の実践につなげる工夫が必要 ・市民協働を進めてきた仙台市として市民がアクションを起こす場所を作る(再掲) 	①市民のアクションをつなぐ人材 <ul style="list-style-type: none"> ・例えば地産課題解決に向かう際のつなぎ手として各地にあるフューチャーセクターのように、市民の力を防災やこの検討委員会で議論していることにつなげる人材が大事であり、それがキュレーションやユニークさにもつながる。早めに人材を育てていくことも必要(再掲) 	①市民全員が災害の経験を共通の言葉で伝える <ul style="list-style-type: none"> ・災害体験の多様さはあるが、「仙台で起きたこと・伝えたいことは〇〇です」と市民全員がシンプルに言えるようにする
②防災について学ぶ仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・子どもから大人まで防災教育の機能もあった方がよい ・防災を勉強できる施設もあった方がよい 	①中心部は防災や災害対応に特化 <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災は津波被害が主であり、被災そのものを伝えることは現場である沿岸部に重点を置き、中心部は防災や災害対応に特化してもよいのではないかと(再掲) 	
③東日本大震災に留まらず、これから起こり得る災害や想定外があることを考える仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・震災を中心に捉えながらも、震災にとどまらず様々な部門をつなぐハブに ・これから起こり得る災害、想定外があること、それにどう向き合っていくか考えることも重要な視点(再掲) ・特定の災害を覚えておく施設というよりも、災害とともに生きるには何か必要かを発信する ・東日本大震災と仙台だけではなく、国内や海外の災害、過去とこれからとのつながりを考える必要がある。そのことは仙台市での震災の教訓を客観化し再認識する機会ともなる ・東日本大震災は人知を超えた巨大な出来事であり、全ては分かり得ない。その「分からなさ」をどのように引き受け、伝えて行けるかがすごく重要 	①モニュメントのような象徴的な存在を通じて想像を超える事があることを伝える <ul style="list-style-type: none"> ・理解できないことがある怖さとは、とても抽象的なこと。モニュメントのような象徴的な存在を通じて伝えられるような作りがあっても良い ②震災を目の当たりにしたことが想像の範囲を広げる経験でもあった <ul style="list-style-type: none"> ・実体験を伴わずに被災映像を見続けることで受ける「まだ見ぬ現実のトラウマ」が今の社会の複雑な問題につながっているような気がするが、自身は震災を目の当たりにして、災害だけではなく、戦争やテロなどに対する想像の範囲が広がった。(再掲) 	①モニュメントを通じて親から子に伝える <ul style="list-style-type: none"> ・釜神様のようにモニュメントの存在を子が親に尋ねることで、親から子にその由来を伝える
④人間としての生きる力を高める仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・人間として生きる力を高められるところ ・災害で心にダメージを受けた方が、気持ちを回復させていくという意味でも、施設なのかプログラムを通じて、生きる力を得られる場所だと良い ・最近の研究で、この震災を上手く乗り越えるためには、災害特有の能力ではなく、リーダーシップや愛他性など人間そのものの能力が影響していることが分かった。人の想定を超えるものが災害ならば、ハードでは対応できず、人間が持つ能力で対応しなければならず、中心部拠点とは市民がそのような人間の能力を身に付けられるところではないか 		
⑤自然と人間社会のあり方を考える仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・自然と人間の関係・自分の暮らしのあり方を見つめ直すような場 ・津波により引き起こされた、今日の間社会では成しえない次元の死が、人間社会の意味を考えさせられる契機となった ・3.11は都市化により感じられなくなった「人間が自然の中にいる」ことを思い出させられた出来事であり、そのことを思い出せるような施設でありたい ・震災当時、津波の後の星空や海について美しいという言葉が異口同音に聞かれたが、それは人の死に直面することで、人間が本能的に持つ自然が、外の自然とシンクロしたから ・打ち勝てないような不安を押し付けられた震災の経験は、震災に限らず、不安に向き合いながらも如何に日常を生きるかという人間の根本的なテーマにつながる ・「(自然現象による)災害には勝てない」から、いざという時には助け合うしかないという構えが必要ではないか ・自然と人間との関係から、災害が災害でない時もある。地球に住んでいるからには自然現象と付き合いなければならず、それを乗り越えることが大事 		
[3]都市の未来のために		
<ul style="list-style-type: none"> ・震災だけの視点ではなく、時代的役割、街のランドデザインの中での役割を踏まえた検討が必要 ・過去を忘れずにおくことが未来に何をもたらすのか ・仙台でやるからには仙台市民に恩恵が無くてはいけない 		
①災害文化・アイデンティティを創造する仕組み <ul style="list-style-type: none"> ・災害の経験を仙台市のアイデンティティとして捉え、災害文化を創り広げていくためのセンター ・例えば川が氾濫することによって内陸の家に船があるように、災害と共存している状況を災害文化と呼んでいるが、主に地方部にある文化。都市化により災害文化と逆行している仙台が、災害文化にチャレンジするというのは、とてもインパクトがある(再掲) 	①災害の経験を整理し続け、世界に共有していく活動の拠点 <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災は非常に大きな悲惨さと不安を皆で同時に体験した出来事。災害文化として、災害で受けた悲惨さや不安、その後の状況も含め震災の経験を整理し続け、世界に共有していくような活動の拠点ではないか(再掲) ・災害文化というためには、災害で経験したプラスの面(我慢強さ、近所づきあいの復活、絆など)と復興が進むにつれて出てきたマイナスの面(堤防の高さ問題や騒音など、利害や観念の対立)の両方を伝えていくべき(再掲) ②今後の対策を考えるためのネットワークの拠点 <ul style="list-style-type: none"> ・災害時のための企業などとのサポートシステムが平時から組み上げられていれば「共助」につながり、災害対応力が増す。そのような今後に対する対策を考えるためのネットワークの核となる施設であると良い 	①災害文化を持つ都市として宣言 <ul style="list-style-type: none"> ・広島市や長崎市のように、一つの自治体であっても、自分たちはこのような自治体だということを宣言している。防災環境都市仙台とずっと謳い続けるならば、仙台は防災文化ではなく災害文化を持っている都市を作っていくという方向性を市民と共有できないかと思う(再掲) ・災害文化を持つ都市と宣言するならば、水やヘルメットの備蓄のような単純な防災対応だけではなく、災害時の情報共有のされ方やその信頼性が揺らぐことへの不安など、想定外を乗り越えてきたからこそ言えることも扱うことが大事(再掲)

[4] 伝承一般		
何をしたい (要素)	コンセプト・手段	実現したいシーン
①現場・人・物のセット <ul style="list-style-type: none"> 被災現場、施設、人がセットであることが効果的 現場の持つ力にはかなわない。震災を学ぶには現場とセットであることが大事 伝えるためには場所、人、物の3つを揃える必要があり、仙台市全体としてその機能をどう備えるか 		①人から人に伝える <ul style="list-style-type: none"> 人から人に伝える
②アーカイブ <ul style="list-style-type: none"> 記録を集めても活用されていない課題がある アーカイブについて、何を記録し、何を残すべきかという改めての議論が必要 アーカイブの質と量を検討する必要がある 	①組織やコミュニティ、企業を巻き込む <ul style="list-style-type: none"> メディアテークで行っているような個人の記録活動の支援を、組織やコミュニティ、企業にまで広げてはどうか ②方法論と極めて長く地道に取り組む覚悟が必要 <ul style="list-style-type: none"> それぞれの記憶を語り合い、それを目に見える形で残していくことはとても大事だが、実際にやるとなると、とても大変な作業。方法論を良く考え、技術とノウハウを持っている人たちを集めてやっていくことが大事 アーカイブは1・2年後に成果を判断するのではなく、100年後・200年後に向けてやるという覚悟が必要。本当に地道で、気の長い作業 ③アーカイブを通じた被災地の連携 <ul style="list-style-type: none"> 他被災地の現物やアーカイブについては、現地性を尊重したい。奪うのではなく、被災地連携の一つとして、アーカイブ研究やアーカイブの支援ができること良い。(再掲) アーカイブ機能は、すでに進んでいるプロジェクトと調整しながら、重複しないように ④複雑さを保つアーカイブと人や時代に応じたキュレーション (再掲)	
③多くの人が訪れる <ul style="list-style-type: none"> ストック (箱) ではなく、フロー (人の流れ) を作り出す施設 拠点の対象者をどこにおくか。市外の人だけではなく、市民にも訪れてほしい 広島の平和祈念公園・資料館などは国内外から人が訪れつつ、市民の参画もある。そのような両立できることを目指したい 人と防災未来センターの事例を鑑みると、中心部は市外から求心力を持つ一方、地元の人客体化する危険性をはらむ 	①人が来るための身近な仕掛け <ul style="list-style-type: none"> 人々から縁遠い施設になると願う結果は得られない。あえて下世話感・エンタメ感も必要 施設が開かれているためにはお茶飲み、おいしいコーヒーなど食に関することが必要 例えば食事できる場所やショップ等の市などが周りにあり、子供が遊び大人も同時に楽しめるような場をつくってリピーターを増やす 入場券引のように、市民が何回も来場しやすい仕組み ②子どもが周りで遊べるモニュメント <ul style="list-style-type: none"> 追悼のシンボルとしてモニュメントが必要であり、周りでは子どもが遊びつつ、モニュメントの由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するような二重の機能が必要。(再掲) ③複数の要素を戦略的に分けて考えること <ul style="list-style-type: none"> 象徴的な存在とフローの仕掛け、アーカイブ等の記録を一括りにしてしまわず、戦略的に分けて考えることも必要 	①リピーターが訪れている <ul style="list-style-type: none"> 絶えずリピーターが訪れている ②市民が外から来た人を案内する <ul style="list-style-type: none"> 仙台市民が外国や他県の人を案内したくなる ③日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に包まれる <ul style="list-style-type: none"> 普段は日常空間として人が集いつつ、特別な日だけ厳粛な空間に作り込むという方法もある

Q4. 拠点の具体像や施設の要否をどう考えるのか？

<ul style="list-style-type: none"> 施設が必要か否か言う前に、何をするか考え、それに必要な人を準備する方が大事であり、その人たちと一緒にどんな場所が必要なのか考えるくらいでなければ、生きた場所は作れない (再掲) 施設をつくるにしても、それを運営し育てていく人づくりとのタイアップが必要。それが無ければハードと運営がかみ合わず、市民を巻き込んだ活動につながらない (再掲) 災害を考えるだけの場所ではなく、アーカイブのように機能的なものを備えつつ、メッセージ性を広げるモニュメントのようなものはあった方がよい ①記憶を次の世代に渡していくアーカイブや展示ができる建物、②多くの犠牲に対する追悼の拠り所となるモニュメント、③子どもたちへの防災教育や災害文化を形成する拠点となるイベント会場や広場。過去 (記憶) から現在 (追悼)、未来 (発信) を考えるとこの3つの機能は必要 施設だけでなく市民行事にすることが大事。住んでいるまちの小学校が集まる音楽祭のようなイベントのように、全部の小学校が関わり思い出に残るような行事を大事にしたい (再掲)

◎ その他のキーワード

<ul style="list-style-type: none"> 震災時の様々なシーンの舞台は「路上」だった 他に例が無い取組みで、海外からユニークで魅力があると思われるようなことを大事にしたい 防災メモリアル施設の東北版を仙台にもう1つ作るのではユニークではない 「ラジオ的なもの」。「声」で伝える。
